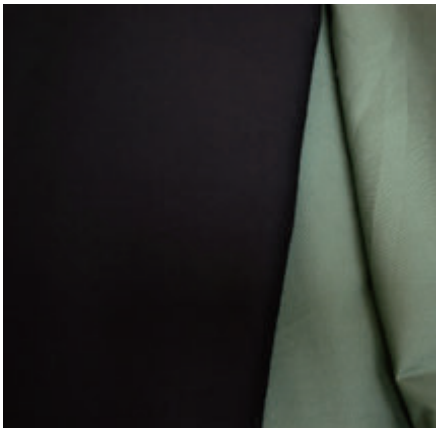

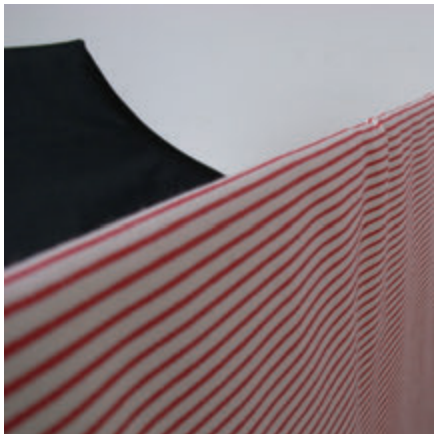

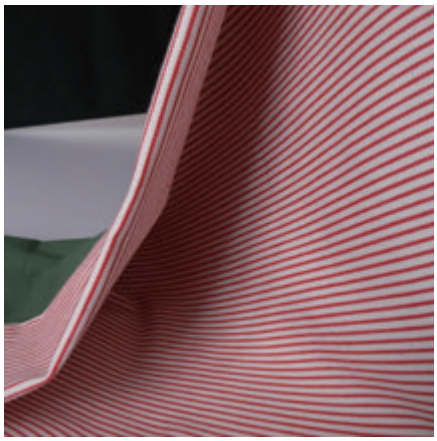
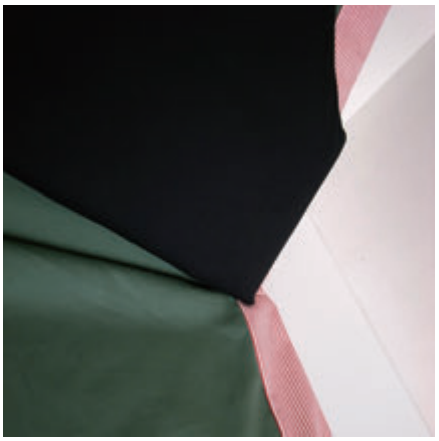

どころか、辺りは一面雪景色が広がっていた。昨日は今年一番の寒波だったとはいえ残すところなく全てを白くおおってしまっている。そのうえ、今朝からのかんかん照りのせいで、まるでスケートリンクのように固く光り、身体から逃げてゆく重心を追いかけた。体力の消耗と、余りの白さにめまいを覚え、
「ここらで一休みしよう。」
小さく小さくひとりごちた。その声はすぐに雪に吸収されてしまい、誰の耳にも届かないのだが、確かに音だった。
” ひゅりひゅらり ～ ” しばらくすると力なく風が吹いた。そうだ、風さえ吹いていなかったのだ。
ここにも時間があったのかと思い出したようにいっぽいっぽ又歩き出した。時折足を滑らせ、まるで宙に浮いているかのようだ。後悔するのを避けていた訳ではないが、振り返ることを思いつかないまま歩き続けた。

それから、どのくらい時間が経ったのだろう。ずっとずっと続く白を渡り、地図によるとここがメインストリートだ。
こんな急勾配なメインストリートがあるものかと半ばあきれたが、北の方角100m程先に灯りをみつけた。宙に浮くより軽やかな足取りで駆け寄った。
その灯りは小さな山小屋だった。中には誰もおらず、たった1つの明かりと1つの窓がある。
「 今夜はここで休むとしよう。」
何時であるのか分からないまま、肩にくいこんだ荷を下ろし、たった1つしかない窓を覗き込んだ。
「 黒 ！ 」
本当の夜が来たのか黒い山でもあるのか、何もないのか、確かな闇がもう手の届きそうなところにある。すると、向こう側